大館市史編さん調査資料第13集

大館市片山

舘コ

発掘調査報告書

第2次

1974・3

大館市史編さん委員会

大館市片山

舘コ

発掘調査報告書

秋田考古学協会員　奥山　潤

秋田考古学協会員　板橋範芳

1974・3

例　言

1　この報告書は，大館市史編さん委員会が実施した，市内片山所在の一遺跡に関する報告である。

2　この調査の法による発掘責任者は市長石川芳男であり，発掘担当者は，奥山　潤である。

3　この報告書作成にあたっては，調査員板橋範芳が執筆し，奥山が補筆した。

4　この報告書の遺構全体の写真は，調査員板橋範芳により，遺物写真は写真家越前貞一氏をわずらわせた。

5　本書に掲載した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の5万分の1地形図，及び5千分の1国土基本図を複製したものである。
（承認番号）昭49総複第298号

目　次

例　　言

Ⅰ　これまでの片山館コ …… 1

Ⅱ　今次調査の経過概要 …… 5

Ⅲ　南郭部発掘調査 …… 5

　A　土　塁 …… 6

　B　長方形・方形竪穴 …… 7

　C　溝遺構 …… 9

　D　角柱掘立柱建物 …… 9

　E　隅丸方形竪穴 …… 9

　F　土壙墓 …… 10

Ⅳ　北郭部発掘調査 …… 10

　A　13号竪穴 …… 10

　B　12号竪穴 …… 11

　C　V字溝 …… 12

　D　円・角柱穴群 …… 13

Ⅴ　出土遺物 …… 13

　A　土　器 …… 13

　B　土壙墓内出土遺物 …… 15

　C　糸巻き …… 16

Ⅵ　遺構について …… 16

Ⅶ　遺物について …… 19

Ⅷ　片山館コ遺跡について …… 20

謝　　辞 …… 26

図・図版目次

図

Fig 1　遺跡位置図 …… 2
Fig 2　遺跡附近地形図 …… 3
Fig 3　舘コ平面実測図 …… 4
Fig 4　南郭部発掘全体図 …… 6
Fig 5　土塁表断面実測図 …… 7
Fig 6　13号竪穴実測図 …… 11
Fig 7　V字溝埋積土層断面図 …… 12
Fig 8　南郭部出土土器拓影図 …… 14
Fig 9　土坑墓出土遺物実測図 …… 15
Fig 10　北郭部発掘全体図 …… 21

図　版

PL 1　館コ全景（右二ツ山）北東より …… 27
PL 2〔1〕　南郭部発掘写真　西より …… 27
PL 2〔2〕　南郭部東側遺構　北より …… 28
PL 2〔3〕　南郭部西側遺構　北より …… 28
PL 2〔4〕　南郭部西側遺構　南より …… 29
PL 3〔1〕　土塁　南より …… 29
PL 3〔2〕　土塁間溝　南西より …… 30
PL 3〔3〕　土塁間溝　南より …… 30
PL 4〔1〕　南郭部東側掘り込み遺構　南より …… 31
PL 4〔2〕　長方形掘り込みⅠ　北より …… 31
PL 4〔3〕　長方形掘り込みⅡ　北より …… 32
PL 4〔4〕　長方形掘り込みⅢ　北より …… 32
PL 4〔5〕　長方形掘り込みⅠ・Ⅱ・溝A　北より …… 32
PL 4〔6〕　長方形掘り込みⅣ　南より …… 33
PL 4〔7〕　長方形掘り込みⅣ内柱穴　東より …… 33
PL 4〔8〕　方形掘り込みⅤ　北より …… 34
PL 4〔9〕　方形掘り込みⅤ内柱穴　北より …… 34
PL 5〔1〕　方形掘り込みⅤ・溝B　北より …… 35
PL 5〔2〕　隅丸方形竪穴　北より …… 35
PL 5〔3〕　南郭部東側土坑墓　西より …… 36
PL 5〔4〕　南郭部東側土坑墓内遺物出土状況　西より …… 36
PL 6〔1〕　北郭部13号竪穴　北東より …… 37
PL 6〔2〕　北郭部13号竪穴出入口部　南西より …… 37
PL 7〔1〕　12号竪穴糸巻き出土状況 …… 38
PL 7〔2〕　12号竪穴糸巻き出土状況 …… 38
PL 8〔1〕　北郭北端部Ⅴ字溝　東より …… 39
PL 8〔2〕　北郭北端部Ⅴ字溝土層断面　東より …… 39
PL 9　土坑墓内出土遺物（現寸大） …… 40

Ⅰ　これまでの片山舘コ

1971年，前市史編さん資料調査員小山純夫氏が，先史遺跡及び石造物分布調査中，館城遺構を発見奥山に報告した。

当地方では，小字名が「○○館」，あるいは通称「館」，「館コ」と呼ばれ，防塞施設と思われる，空堀・土塁などを配置する遺跡が数多く点在する。この発見された館城遺構も通称「館コ」と呼ばれており，数多い他の「館」，「館コ」と区別し，遺跡位置を明確にするため，遺跡のある地の名称をとって，片山「舘コ」遺跡と呼ぶことにした。

片山「舘コ」遺跡に関する文献資料は，現在までのところまったくない。ただ地主である谷地田家には「あそこの地は，むかしお城のあったところだから，代々の当主は粗末にすることのないように」という家訓が言い伝えられている。そのためか，大館市周辺に存在する館城跡のうちでは，きわめて保存度の高い遺跡である。

遺跡は（Fig 1，2）大館市街の中心より，国道7号線を西へ約1.5km，北側にみえるこんもりとした二ッ山の東麓約400 mの台地縁にあり，地番は秋田県大館市字片山小字立杭上岱22・24番地である。

台地は大館市街がのる台地の上位面と同一面で，台地の北を西流する長木川と，南を西流する米代川により侵蝕をうけ，この両河岸の低地に向って流れた谷によりつくり出された，舌状の突出部を利用して館城遺構が造成されている。

台地上表部は，古十和田火山の堆積物である火砕流と，その二次堆積物，いわゆるシラスによって形成されている。シラス台地は，風化侵蝕を受けた場合，その段丘崖は急斜面を形成して安定する。その特性と，同時に雨水による下刻性が強いことから生じる小谷によって，いわば縦のひび割れと，台地下の湿地帯，近くを流れる河川などの地形をも加えて，砦・館城を造成するのに甚だ都合のよい条件となる。

台地の標高は，舘コが57m，南側の道路で60 mぐらい，眼下の水田低地は48～50m，台地との比高差は約10 mほどである。二ッ山々頂は126 mであるが，台地よりの比高は約65 mである。

以下これまでの片山舘コに関する調査を記す。

1972年6月25日（日）　奥山を中心に，トレンチ発掘による予備調査を行った。その結果，長軸2.3m，幅1.8m，長軸が東西方向で東半部に1.6 mの深さをもつピットが1コ，小型方形竪穴2コ，長方形竪穴1コを検出。方形竪穴の1つは，深い8本の柱穴をもち，北東の一辺から外に張り出した入口を備えていた。その他角柱の掘立柱穴が検出され，擦文式土器，土師器が数片出土した。

1972年7月25日より8月7日までの14日間，大館市史編さん事業の一環として，第1次片山舘コ発掘調査が実施された。第1次発掘調査の詳細な報告は，『大館市史編さん調査資料第5集，大館市片山　舘コ　発掘調査報告書　第1次』において既にのべられ簡単に記すると，後北C式期の竪穴と

Fig1　遺跡位置図

思われる長方形竪穴9戸，倉庫ふう竪穴1戸，完形の薬壺，銭貨，炭化米，炭化粟粒，木器を出土した方形竪穴1戸，径1.5～1.8mの片口状の緩斜する溝状施設をもつピット3コ，桁行5間（7尺等間）梁間4間（7尺等間）及び桁行5間（北より5尺・5尺・6尺・7尺・6尺）梁間4間（東より9尺・8尺・7尺・7尺）の角柱掘立柱建物が2棟検出された。出土品より，後北C_2—北大式期，土師—擦文式土器期，鎌倉—室町期，中世末期—江戸初期の4～5期にわたって，この館コは使用されたと思われる。

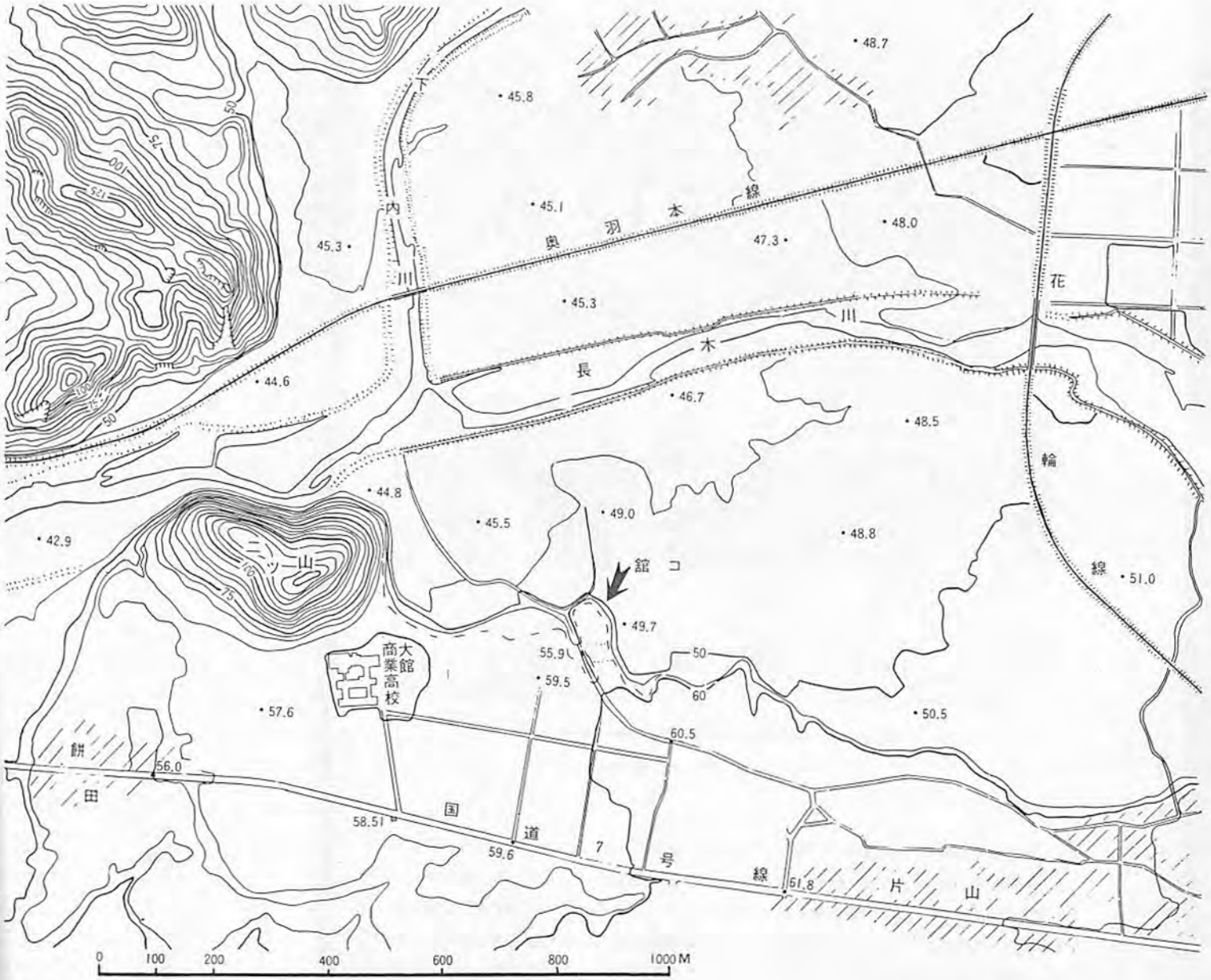


Fig 2　遺跡附近地形図

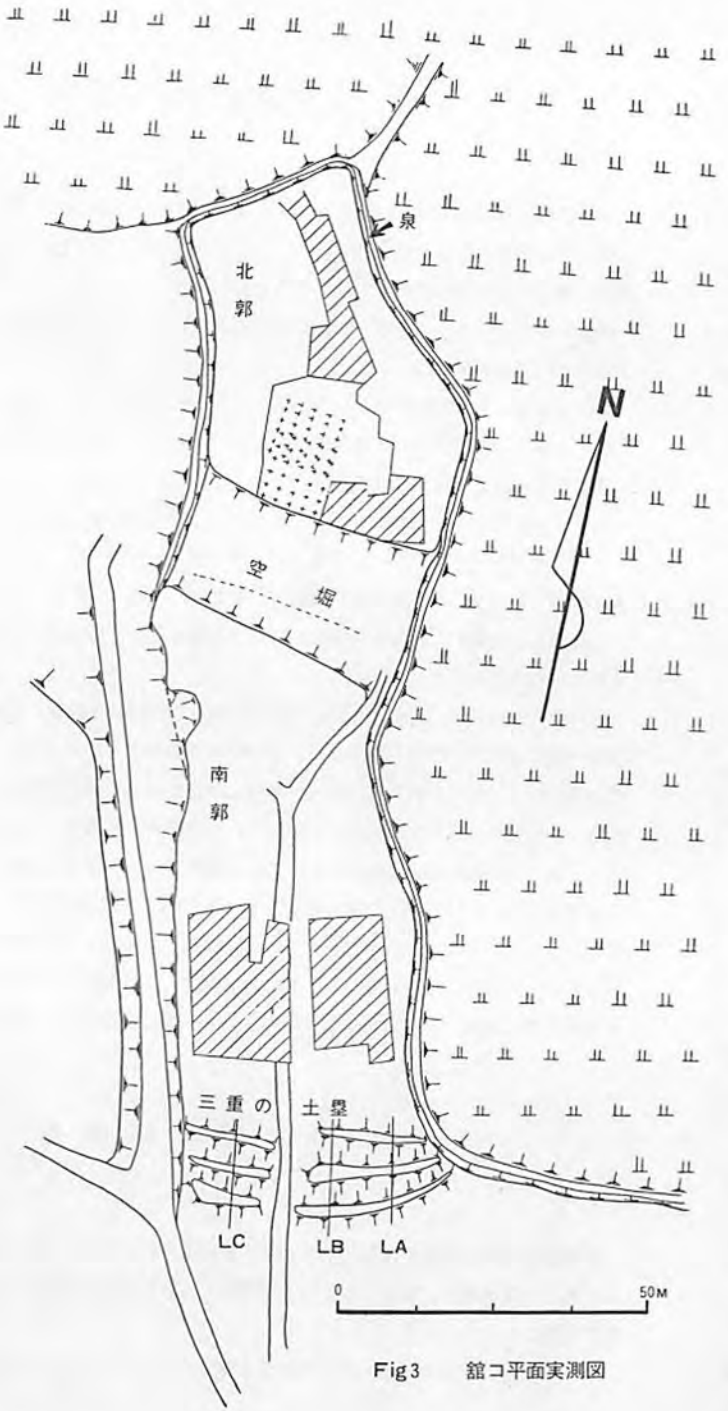


Fig3　舘コ平面実測図

Ⅱ　今次調査の経過概要

第Ⅰ次の北郭部発掘調査地区東側，及び北側台地先端部までの地域を，今次発掘調査の目的としたが，片山部落共有地である南郭部に，ブルドーザーを入れて整地するという情報が入り，急遽南郭部の緊急発掘調査も合わせて行なうことにした。

南郭部はすでにブルドーザーにより耕土が寄せられており，その為発掘調査区域が制約され，中央部だけの発掘調査に終った。

南郭部南端，すなわち館城として利用した舌状台地基部には，東西に走る三重の土塁があるが，ここの調査は，春に行った写真撮影と，今次ブルドーザーにより切り込まれていた部分だけの断面図作成作業を行ない得ただけである。

南郭部中央は，農道を残して，東・西を調査したが，東側より長方形掘り込み４コ，方形掘り込みⅠコ，隅丸方形竪穴Ⅰ戸，土壙墓Ⅰコ，角柱掘立柱建物Ⅰ棟，を検出した。西側では掘立柱穴を多数検出できたが，Ⅰつの遺構（建物）としては，つかまえることができなかった。

北郭部では，第Ⅰ次調査時に排土のため未調査であった東南隅，及び第Ⅰ次発掘調査地域から，北端までの調査を行なった。

東南隅においては，東西約3.9m，南北約3.4m，東壁北側に緩い傾斜をもつ出入口と思われる遺構を付属する竪穴住居跡を検出した。この住居跡の東壁を切り込んで，第Ⅰ次発掘調査で検出されたと同様の，片口状の溝をもつピットが検出された。この他円柱形ピット２コ，円・角柱掘立柱を検出，合わせて，第Ⅰ次発掘調査において，北半分だけを精査し，今年度に南半分の精査を行なう予定であった12号跡の調査を行ない，鉄芯に撚糸をまいた糸巻きを検出した。

北端部においては，東西に走る幅約３m，深さ約2.4mの溝を検出したが，長さ約7.5mだけの確認で，西側へどのような延び方をしているかは不明である。この溝の北側に，溝に沿う円柱の掘立柱を３柱，その北に小型方形竪穴Ⅰ戸，方形竪穴と長方形竪穴の結びついた「L」字状の竪穴Ⅰ戸を検出，溝の南側と第Ⅰ次発掘調査地の間に円・角柱掘立柱穴を多数検出した。

Ⅲ　南郭部発掘調査

南郭部は，片山部落の共有地であるが，発掘調査に入る前，ブルドーザーを入れて，南郭部南端の三重の土塁を削り，整地するという情報が入り，代表者谷地田一雄氏と連絡をとり，緊急発掘調査を実施した。

調査地域は，ブルドーザーにより表土を整地されていたため，中央部だけの調査にとどまった。

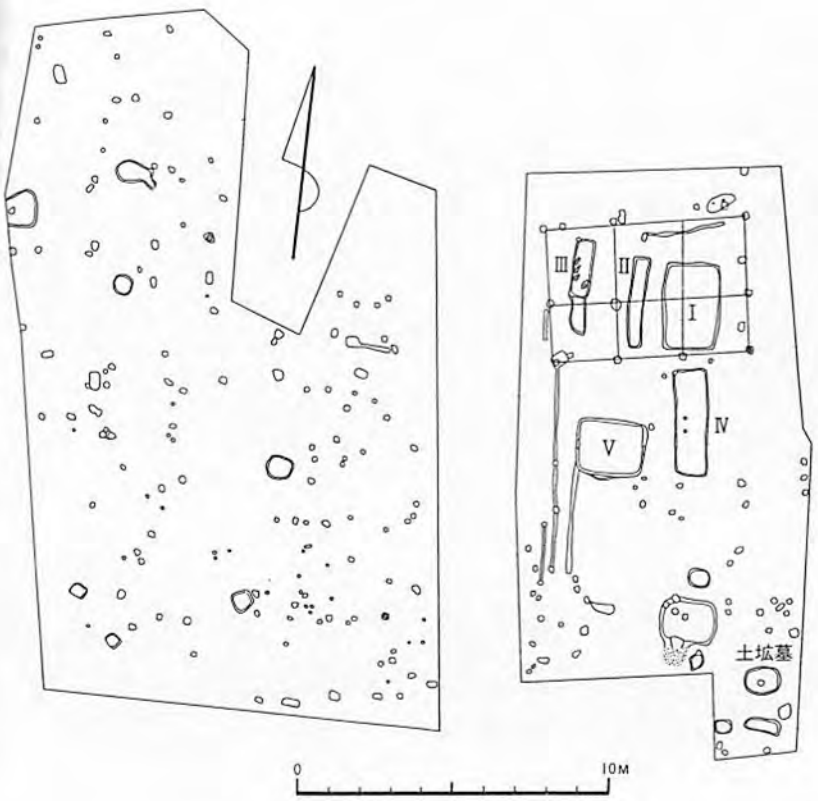


Fig4　南郭部発掘全体図

中央部を東西の2ブロックに分け調査したが，その結果東ブロックと西ブロックとでは，遺構がまったく異なっていた。すなわち，西ブロックでは円・角柱掘立柱穴と，円・だ円形の浅いピットだけの遺構であったが，東ブロックでは，長方形掘り込みが4コ，方形掘り込みが1コ，小形の方形隅丸竪穴が1戸，土壙墓と思われるだ円形ピット1コ，角柱掘立柱建物1棟，と多種にわたる遺構が確認された。

A　土　　塁　(Fig3・5，PL 3〔1〕〔2〕〔3〕)

南郭部南端，館城に利用した舌状台地の基部に，東西に走る三重の土塁が築かれ，土塁間に空掘りを施設する遺構があることは，この片山舘コが発見された当時から確認されていた。

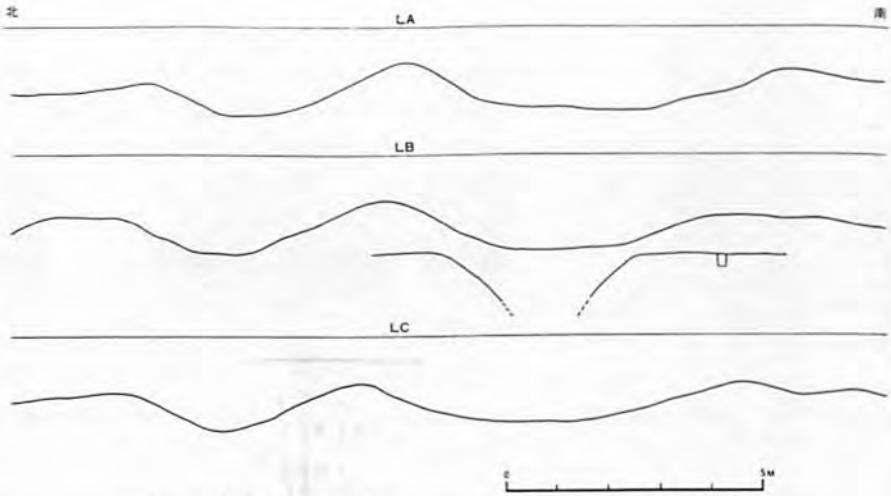


Fig5　土塁表断面実測図

今年度，片山部落でこの三重の土塁を削り，整地するということで，発掘調査にとりかかったが，土塁には大きな木の根がすき間なく入り込み，断面をみるために切開することも不可能であった。そこでわずかではあるが，ブルドーザーにより切り込まれていた部分で，確認作業をおこなった。それにより一部分ではあるが，次のような結果を得た。

土塁間にはさまれた空堀は，南土塁と中央土塁間で，5.5～7 m，中央土塁と北土塁間は4～5 mの幅で掘り込まれ，空堀基底部は出水のため確認できなかったが，1 m以上であることは判明した。土塁の築土は，この空堀部に流れ込み，当時の高さがどの位であったかは判明しないが，現高地山平坦部より0.7～1.2m，空堀部に流れ込んだ土を築き上げると，推定2 m位になり，土塁の頂部から，空堀の基底部までは3 m以上となるものと思われる。なお空堀は，三重の土塁の南北にはみられず，はさまれる2つの谷部だけに施設されている。また南土塁頂部直下の地山に円柱穴が検出されたが，土塁断面をみることができなかったので，その性格は不明である。土塁頂部に配置された柵木の柱の柱根部にあたる柱穴とも考えられるが確証はない。

B　長方形・方形竪穴

I　南北約2.8m，東西約1.9m，深0.4～0.45m，わずかではあるが，東西壁中央部がふくらむ。壁は床面よりわずかに上に開くが，床面が全体に起状がはげしく，壁の傾斜はおのおの異なる。掘り込み内に柱穴はみられず，遺物の出土もなかった。(Fig4，PL4〔2〕〔5〕)

Ⅱ　Ⅰの西約0.6mに隣接し，南北約3m，東西約0.5m，深0.25～0.3m，平面形は中央部でくびれる，かるい「く」字型である。地山からの掘り込みは雑で，落ち込み線は波形を描く。底面北端中央に，径約10cmの円柱掘立柱穴があり，床面中央西壁寄りに20×25cmの角柱掘立柱穴が掘り込まれている。Ⅰ同様，床面は全体に起状がはげしく，壁面下においては最もそれが顕著である。掘り込み内から遺物は出土しなかった。（Fig4，PL4〔3〕）

Ⅲ　Ⅱの西約1.3mにあり，南北約2m，東西約0.6～0.65m，深0.3～0.35mの掘り込み（Ⅲ－a）の南に南北約1.2m，東西約0.5m，深0.35～0.4mの掘り込み（Ⅲ－b）がとりつけられた形で，Ⅲ－a掘り込み内床面に，25～30cm大の河原石4個が置かれていた。河原石は火熱は受けていなかったが，一部研磨痕らしい面がみられた。Ⅲ－a の床面は，Ⅰ・Ⅱと比べると比較的平坦で，壁面は上に開く。Ⅲ－b の床面は最も起伏がはげしく，平坦面はみられず，壁面の傾斜変換線で床面と区別ができるだけである。Ⅲ－a・Ⅲ－b 内から遺物は出土しなかった。（Fig4，PL4〔4〕）

Ⅳ　Ⅰの南約0.7mにあり，南北約3.5m，東西約1m，深0.35～0.4m，平面形がわずかに弓形にそる。床面北西隅に径約10cmの直立する円柱掘立柱穴，床面中央西寄りに径5～6cmの円柱掘立柱穴が2個検出された。2個の小さな柱穴は，深さ15cmほどで，断面が円錐形である。これは柱の先端を尖がらせ，床面に突き込んだものであろう。床面は東・西がわずかに高く，中央部が低い弧状であるが，面は平坦である。壁面は，北・西・南壁が直上し，東壁は床面からなだらかな曲線を描き，壁上部で直上する。掘り込み内から遺物は出土しなかった。（Fig4，PL4〔6〕〔7〕）

Ⅴ　Ⅳの西約1m，Ⅱの南約2.5mにあり，南北約1.9m，東西約2.2m，深0.55～0.6mで，数値では長方形であるが，他に比べその数値の比は方形に近く，一応ここでは方形掘り込みとして扱った。他の長方形掘り込みより離れ，その平面形も方形に近く，深さも他に比べ相当深い。掘り込み内を4ブロックに分け調査したが，北東・北西・南東ブロックに，掘り込み下約30cmのレベルで，円柱掘立柱痕を検出した。また同レベルで壁沿いにも，柱穴につまっていた黒出土が入り込み，掘り込み内充土である黄色土ブロックを含む混合土とは明らかに区別がついた。（PL4〔9〕）

東西壁寄中央に，南北25～30cm，東西10cmの，平べったいだ円形の柱穴がみられた。東壁沿いにはこの柱穴を中心に，柱穴の幅で溝が1m程度検出された。東西10cmという幅は上位面で確認された，壁沿いの黒色土の入り込んだ幅と同じである。

南壁の中央，壁面中ほどに約50cmほどの幅の半月状の掘り込みがみられた。
（Fig4，PL4〔8〕）

C 溝 遺 構

東ブロックの北に，東西に走る溝（溝A）が1条，西に南北に走る溝（溝B）が3条検出された。

溝A　長方形掘り込みⅠの北約1mのところに検出された溝で，東西に走る長さ約2.5m，幅約10cm深約10cmの「U」字状の溝である。これがどの遺溝と結びつくかは不明である。（Fig4，PL4〔5〕）

溝B　東ブロックの西側に検出された，南北に走る3条の溝で，東側の溝は，長方形掘り込みⅤの南西隅につながる。中央の溝が一番長く南北約6.8m，溝の南北両端および中央部に計4個の10×10cmの角柱掘立柱穴が検出され，北端の角柱掘立柱穴は，角柱掘立柱建物の南西隅柱と同一である。西側溝は，中央溝の南端部と並行するもので，南北約1.8m，南端に20×20cmの角柱掘立柱を備える。（Fig4，PL5〔1〕）

D 角柱掘立柱建物

長方形掘り込みⅠ・Ⅱ・Ⅲを覆うようにして，東西3間，南北2間の角柱掘立柱建物が検出された。（PL2〔2〕）南西隅柱は，溝Bの一番長い中央溝北端柱と重複する。また長方形掘り込みⅠ・Ⅱの北側に溝Aがあるが，これは角柱掘立柱建物の中に入る。（PL2〔2〕）

東西に桁を置き，南北に面する建物と思われ，桁行7尺等間の3間，梁間北より8尺・6尺の2間というプランの建物である。（Fig4）

E 隅丸方形竪穴

東ブロック南端部に検出された，東西約1.8m，南北約1.5mの浅い竪穴である。床面は東から西へ緩やかに傾斜しているが，凹凸はなく平坦である。南側に径40cm，深30cmほどの不整形ピットが検出されたが，その上部及び周囲に焼土が検出された。南郭部調査において火気痕がみられたのはここだけである。竪穴内に4本の角柱掘立柱穴が検出されたが，いずれも20cm前後のもので，北西隅にみられた。（Fig4，PL5〔2〕）

F 土 坑 墓

東ブロック南東隅に，東西約1.1m，南北約0.9m，深約0.2mのだ円形ピットが検出され，床中央部に径25cmの円形ピットがみられた。床面はゆるやかな丸底で，壁は直上する。(PL 5〔3〕) 北東部床面より，鉤状鉄器と銅金具2片及び木片が検出された。(PL 5〔4〕)

Ⅳ 北郭部発掘調査

当初，昭和47年度に行なった発掘調査区の東側と，北端までの予定であったが，南郭部において緊急の調査を行なったため，北郭部の調査範囲がせばまった。発掘調査の結果，東側においては，竪穴住居跡1戸と，片口状の溝をもつピット1コ，円柱形ピット2コ，円・角柱掘立柱穴を，北端までの調査では，V字溝とそれに伴う円柱掘立柱穴，小型の方・長方形竪穴2戸，円・角柱掘立柱穴多数を検出した。

A 13号竪穴 (Fig 6，PL 6〔1〕)

東西約3.9m，南北約3.4m，地山よりの掘り込み深約0.3mの長方形竪穴で，東壁北側に，東西約1.3m，南北約1.1m，東から西へ，すなわち竪穴外から竪穴内へ緩やかに下る突出部が検出された。(PL 6〔2〕) 竪穴長軸線は東西。

柱穴は，各四隅床面に1柱づつと，四隅間壁下床面に1柱づつの，計8柱である。柱穴は，南東隅と西側中央柱が角柱掘立柱穴で，他は円柱掘立柱穴である。大きさは，角柱掘立柱穴が径15～20cm，円柱は約15cmで，深さは，北西隅，西側中央，南東隅，東側中央の各柱穴が床面から約55cm，南西隅が25cm，南側中央が30cm，北側中央が20cm，北東隅が10cmである。東壁北側の突出部にも柱穴があり，北東・南東・南西隅に各1柱づつ，北西隅柱は，竪穴の北東隅柱と同一である。突出部につく柱穴は比較的小さめで，径が10cm内外，深さも10～20cmほどである。

床面は平坦で，北東部だけが，突出部の傾斜の延長で少し傾斜をもつ。壁下に周溝はみられなかった。

東側には，第1次発掘調査でも検出された片口状の緩斜する溝状施設をもつピットが検出され，その一部は東壁南側及び突出部南壁を切り込んでいた。ピットの掘り込み口は径約1.3m，底径約50cmで，深さ地山より約1.2mである。片口状の溝施設は，ピットと接する側の幅約90cm，長さ約1.8mでピットから離れ次第に幅はせまくなる。又，竪穴北西隅に，径約90cm，深さ約80cmの円

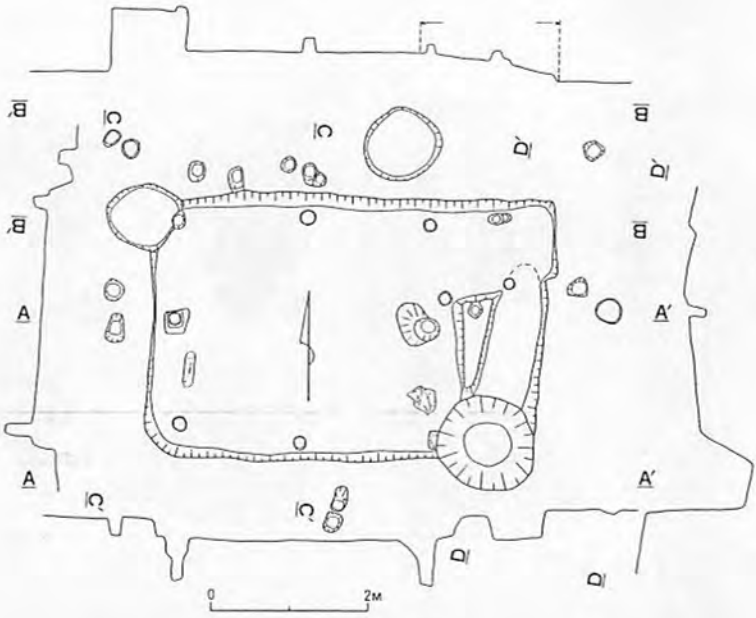


Fig 6　13号竪穴実測図

柱状のピットが検出され竪穴北西隅を切り込んでいる。このピットと同様のものが，竪穴外北側に1コ検出された。

南西部西壁寄りに，45×15cm大の長い河原石が，南東部東壁寄りに，30×35cm大のゴツゴツした河原石が置かれていた。

火を使用した跡及びカマド施設は検出できなかった。

B 12号竪穴

第1次発掘調査で，竪穴の北半分を調査し，焼籾・焼栗・くりぬき木器，銭貨，陶器壺を出土した12号竪穴は，今年度南半分を調査した。その結果，鉄芯に撚った糸を巻きつけたものと木器が出土した。(PL 7〔1〕〔2〕)　12号竪穴においては，焼籾・焼栗は竪穴内全体に散らばってみられたが，その他の遺物は東壁寄りに片寄って出土した。竪穴内の床面は平坦で，床面に柱穴はみられなかった。

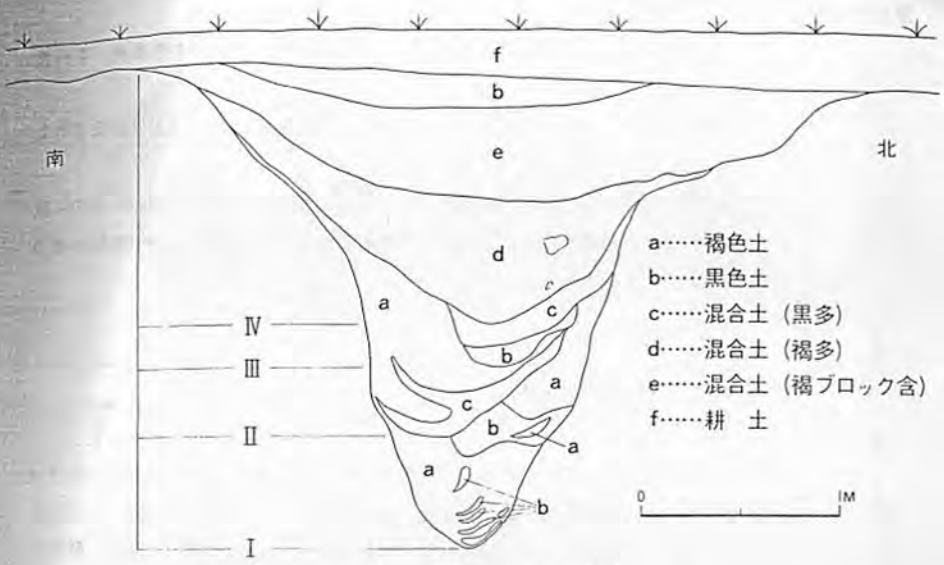


Fig7　　V字溝埋積土層断面図

C　V　字　溝　(Fig7, PL8〔1〕〔2〕)

台地北端より南へ約7 mのところに，東西に走る，地山掘り込み幅約3.5 m，中段の傾斜変換点幅約1.4 m，深さ約2.4 mの，上部が広くアサガオ型とでもいうべき「V」字溝が検出された。

溝内に埋っていた埋積土の層序によって，4次にわたる底部，すなわち3回の底部改修のあとがみられた。

第Ⅰ次の底部は，地山を掘り込んだ最初の基底部であり，そこに黒色土が5層，シラスと相互に基底部より約45cmほど堆積している。その上に黒色土にシラスが少し混合している土が厚さ13～25cmほど堆積し，その上に褐色土が，厚さ約50cmほど堆積している。ここで溝が，基底部より110～120cmほど埋ったものと思われる。

第Ⅱ次底部は，褐色土，その下のシラス混入の黒色土，その下のシラスを掘り込んで改修している。深さ約1.9 mである。第Ⅱ次底部には北側から黒色土の多い褐色土との混合土が流れ込み，南側から褐色土が落ち込んでおり，底部で，混合土と褐色土が重なりあっている。

第Ⅰ次底部の上位堆積褐色土と，第Ⅱ次底部改修の際掘り込んだ北側の掘り込み面はそのままにし，第Ⅱ次底部に南側から落ち込んで堆積した，褐色土の落ち込み面もそのまま生かし，溝中央部だけを，幅約65cm，深さ25cmの規模で，第Ⅱ次底部褐色堆積土を掘り込んだのが，第Ⅲ次底部である。この掘り込み内には，黒色土の多い混合土が下に，褐色土の多い混合土が上に幅10cm

ほどで堆積している。

上層の褐色土の多い混合土上が少しくぼんでおり，これが最終の溝の底部と思われるが，Ⅰ～Ⅲ底部ほど明瞭ではない。

溝北側には2m間隔に溝に沿う，径20cm大の円柱掘立柱列が検出されたが，南側では検出されなかった。

今回の調査では，東西の長さ約7.5mほどしか確認できなかった。これは北端東西間の5分の1ほどの長さで，西側においてどのような構造をもつものか確めることによって，この溝の性格もある程度把握できるであろう。

D　円・角柱穴群

円・角柱掘立柱穴が多数検出されたが，第1次調査時のように建物を想定できる柱穴のならびは把握することができなかった。ただFig10をみてみると，それらの掘立柱穴が，3～4mの円を描きながら1つのグループを形成しているようにも見える。あるいは地面に柱を立てただけの掘立小屋のようなものかも知れない。

Ⅴ 出　土　遺　物

第1次発掘調査時もそうであったが，遺物の出土は数少なかった。遺構と遺物の関係がはっきりしているのは，土壙墓より出土した鉤状鉄器と銅金具，及び12号竪穴より出土した糸巻きである。

A 土　　器 (Fig8)

土器は5片だけで，すべて南郭部東ブロックからの出土である。

1は体上部破片で，横位に貼り付け微隆帯文をめぐらし，それから体部へ2条の貼り付け微隆帯文が右斜め下りに配置され，微隆帯文間には縄文をほどこし，外は磨消してある。この磨消し無文帯に，鋭い工具による列点状の刻文がほどこされている(矢印)。この土器の整形準序は，器外面に縄文をほどこし，微隆帯文を貼り付けた後，この微隆帯文を境に，磨消し技法により，縄文帯と磨消し無文帯に分け，最後に磨消無文帯に，鋭い工具により刺突による列点状の刻文をほどこす。となるであろう。

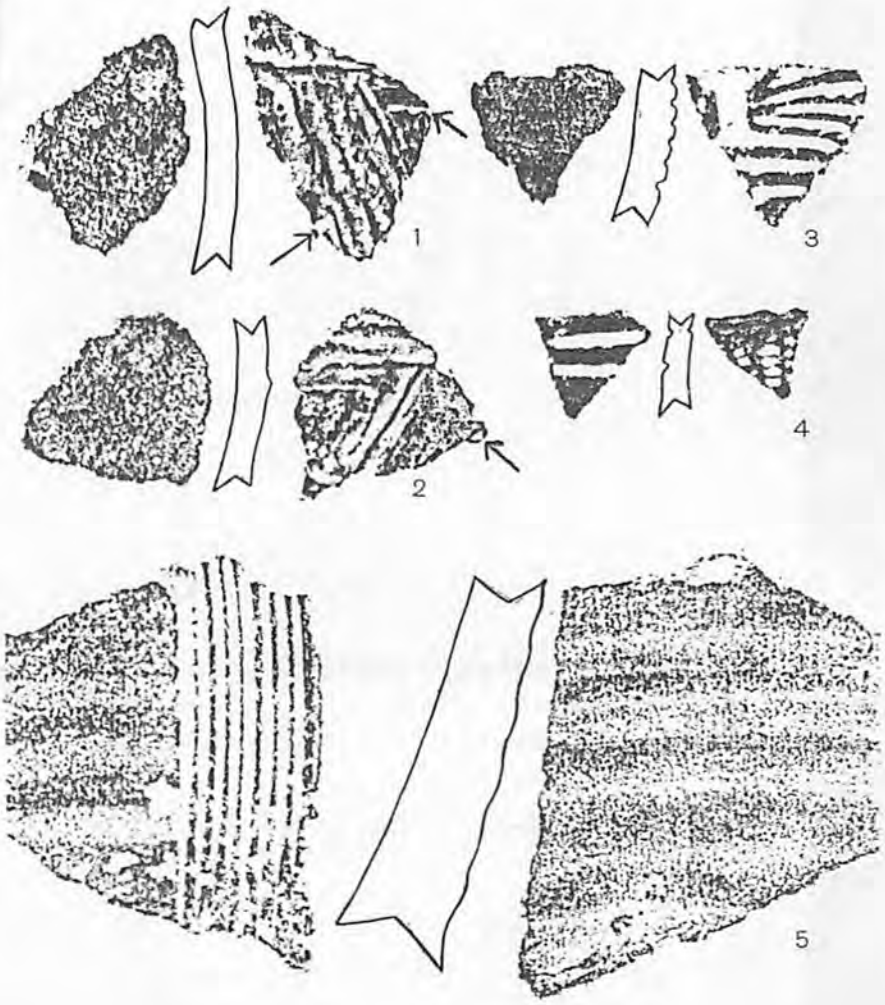


Fig8　南郭部出土土器拓影図（現寸大）

2はやはり体上部破片で，横位にめぐらす貼り付け微隆帯文より，1と異なり左斜め下へ配置されている。体部の文様は1同様，縄文帯と，磨消しによる無文帯に分かれ，無文帯には鋭い工具による刺突列点状の刻文がほどこされている(矢印)。1・2とも胎土に粗砂粒を含むが，焼成は良好である。

3は体上部破片と思われ，丸棒状工具により，やや太めの沈線による変形工字文，ないし菱形文

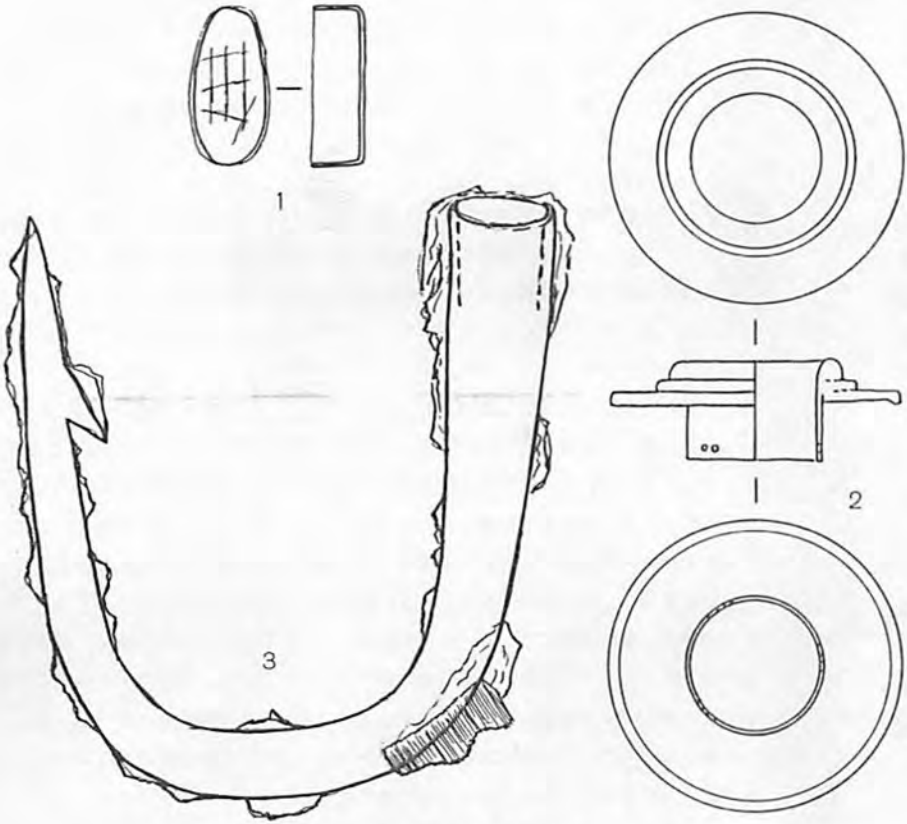


Fig9　土坑墓出土遺物実測図（実大）

が横位に施文され，その下に2条の横位にめぐると思われる沈線が配置されている。

4は小破片で，口線部下わずかのところに位置する部分と思われる。外面上位は横位に磨消しが行なわれ，その下に右斜縄文がほどこされている。内面には丸棒状工具による2条の沈線がめぐらされている。

5は摺鉢で，須恵質の暗灰色をした土器である。粘土を巻き上げ，ロクロにより成形している。内面には8条の深い櫛目文が縦位に配されている。

B　土坑墓内出土遺物　(Fig 9，PL 9)

1はキャプ状の銅金具で，長径約2.5cm，短径約1.3cm，深さ約0.7cmである。外面に線状のタタ

キ目のようなものがある。

2は，径4.7cm，中心に径2.2cmの孔を穿った円盤状の銅金具に，一方を折りまげた，長さ1.6cm，径2.1cmの円筒状銅金具をさし込んだ製品で，円筒の下部に目釘穴と思われる2コ1対の孔が，等間隔に3ケ所穿たれている。

3は鉤状の鉄製品で，一方は先端をするどく尖がらせ，反刺をつけた刺部，一方はものをさし込めるように，盲孔を有する。

3は，アイヌのホロカナウケウッブと似ていて，1・2もその付属品と思われる。

C 糸 巻 き (PL 7〔1〕〔2〕)

1972年の第1次発掘調査で，銭貨，陶器，木器，炭火米・粟を出土した12号竪穴の，南半分を今年度調査した。調査により鉄芯に撚った糸を巻いた糸巻きが出土した。現長約11cmの，一方の先端が折れ曲った鉄芯に，細い撚った糸が巻かれているもので，糸は鉄化して，さわるとボロボロととれる。

Ⅵ 遺 構 に つ い て

南郭部発掘調査により確認された，長方形掘り込み群は，いかなる性格をもつものであろうか。北秋田地方において，古代末期から中世における発掘調査は数少なく，また館城のような，大きな面積を占める遺構の発掘調査は，時間と経費の面より，かなり困難なことがあり，現在のところこのような遺構の検出例はない。ただ方形掘り込みと呼んだ，矩形の深い竪穴についてだけは，北秋田地方においてその形を求めようとすれば，次の二例があげられる。

一つは，昭和30年4月22日から2週間にわたり，東京大学東洋文化研究所によって行なわれた，秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡[1]の第二館址，第五，第六住居跡にみることができる。第五，第六住居跡についての説明部分を原文のままここに掲げる。

第五号住居跡

右の地点のやや北に當る個所で，トレンチを東に擴張したところ，2個の小さい竪穴が出てきた。第五は，そのうち南側に位するものである。整然とした隅圓の矩形をなし，底面は平坦で，壁はほとんど垂直に近い。地表からの深さは，124～136センチもあり，この七館で発見された竪穴のなかで最も深い部類に属する。柱穴は底面にはなく，外口の縁辺に沿って，10個ほど不規則に並んでいる。これらの穴に柱を立て，それを放射状に束ね上に屋根を葺いたのであろう。極めて簡単な小屋

(1) 江上波夫・関野雄・桜井清彦　館址　東京大学出版会　1958

掛である。もちろん炉址などもない。

第六号住居址

右の第五の北方10メートルばかりの地点で発見された。さらに小形な竪穴で，長径1.4m，短径1mほどの不整形をなす。底面は平坦で，壁は壺の内壁のように外方に彎曲しているのが珍しい。外口の縁辺に沿って，東南・東北・西北の位置に，柱穴がそれぞれ1個ずつ発見された。西南の位置にもあるかと思って，よく調べてはみたが，どうもここにはなかったらしい。この方向はおそらく出入口で，屋根がかかっていなかったのであろう。とにかく，こんな小さい竪穴では，人が横になることができない。あるいは物置きか，家畜小屋か見張小屋の類でもあろうか。なおこの住居跡のすぐ南側に當る窪みは，樹の株あとのようである。

以上の第五・第六住居跡と，本跡の方形掘り込みとを比べてみると，柱穴が竪穴外と，竪穴外に存在するという違いがみられる。しかし，第六号住居跡とは，柱穴の位置に違いはあるが，ともに北東・北西・南東部に柱穴を見出している。方向の一致はともかくも，四柱による上屋でなく，三柱による上屋であるらしいこと，方形とはいえ長径と短径の差があること，竪穴自体が小規模で深い（第六住居址の説明文の中に深さについての記述はないが，『館址』図版第六－2によって判断できる）ことなど，その形状はよく似ている。

今一つは，昭和47年4月29日より5月7日まで，大館市史編さん委員会により発掘調査された，秋田県北秋田郡比内町谷地中字館20・21番地にある「谷地中館」遺跡にみられる[(2)]。すなわち，長方形掘り込み遺構A・Bと呼んだ遺構がそれである。

長方形掘り込み遺構A

長軸の長さ約2m，短軸の長さ約1.5m，深さ0.9mの長方形掘り込みで，壁は四辺とも直上し，壁面，床面は平坦で，しっかりしている。

この遺構の東隅が第Ⅸ号竪穴の壁部を切っており，竪穴より後世の遺構であることが判明した。掘り込み内には，黒色土と，地山の混合土が充満しており，埋積土中より土師器口縁2片が出土した。

長方形掘り込み遺構B

長軸の長さ約2.2m，短軸の長さ1.7m，深さ0.5mの長方形掘り込み遺構で，A遺構同様，壁は直立し，壁面，床面とも平坦でしっかりしている。埋積土中上部より，鎚先と思われる鉄製品が出土した。

(2) 谷地中「館」・中野円墳状遺構　1973・3　大館市史編さん委員会

この長方形掘り込みについては，その用途・性格は不明であった。鋤先と思われる鉄製品については，小技指七館遺跡より3個出土している。しかしその形状は似ているが，利部が両者ではまったく異なるようである。すなわち谷地中館のは両端に突起のある反対側が刃部となると思われたのに対し，七館のそれは，突起間が刃部になると思われた点である。それを除けば両者ともまったく一致するものをもっている。

このような長方形・方形の比較的深い竪穴について，その性格を述べているのは七館の第六住居址についてだけである。「物置きか，家畜小屋や見張小屋の類でもあろうか。」である。

この度片山舘コ発掘調査により，このものは，単独で存在するというよりも，他の長方形掘り込み群と何んらかのかかわりをもちながら，その使用目的が，他の長方形掘り込みと少し異なるものであろうと思われた。

掘り込みの深さが他と異なりかなり深い，壁は直上し，壁面・床面が平坦である。東壁・北壁にみられた，壁沿いに掘り込み内の充土とは異なる土が埋積していたのは，どのような意味をもつものであろうか。東・西壁下の掘立柱との関係より，もし壁面を板材のようなもので造作していたとしたならば，他の長方形掘り込みと異って，かなり手のこんだ，堅固な建造物になるであろう。

今片山舘コの方形掘り込みⅤを考えるに，家畜小屋ではあまりに手が込みすぎてはいないか。見張小屋とすれば，台地中央にあるという位置関係。上に高く上げるというより，下に掘り込んで，その部分を入念に造作している点などから考えにくい。このような遺構が，はたして日本という地域の中で，どのような位置，環境の所に建造されているかは，残念ながら把握できないが，当地において，冬という環境を見逃して考えることはできない。当時の人々が，冬に対しどのような工夫をしながら，生活し生きてきたか，これからさぐっていかなければならない大きな課題であり，発掘調査において決して忘れてはならない点であろう。

これら掘り込み群・角柱掘立柱建物，溝の関連は一応次のように復原してみた。長方形掘り込みⅠ・Ⅱ・Ⅲは，角柱掘立柱によって上屋がかけられた，一体の遺構であり，作業場，あるいは倉庫的なものであろう。掘り込みⅣ・Ⅴには，それぞれ独自の上屋がかけられていた。角柱掘立柱建物南西隅柱より南へ，柵あるいは塀が溝上に設けられ，この柵あるいは塀が，南郭部の東側と西側を区画するものであった。

北郭部の出入口と思われる，緩斜面を有する突出部をもつ竪穴住居跡は，近年この地方において，かなりその例が知られるようになってきた。前掲した，谷地中館遺跡から3戸，同比内町真館遺跡[3]でも2戸検出されている。それらはすべて，竪穴の突出部であり，竪穴内に施設されることはない。またこれまでのところ「館城」遺構だけにみられる竪穴住居であることも見逃せない。

連郭式館城跡の発掘調査は，この地方ではじめてであり，北端部の溝については，現在のところその性格は不明である。防禦用，排・集水（溝の東側延長の台地中腹に泉がある）用等考えられるが，西側の延長上で，どのような形態をとるものかも確認されていない今，その性格については，はっきりしたことはいえない。

---

(3) 奥山潤・富樫泰時　真館緊急調査報告書　昭和48年2月

Ⅶ 遺 物 に つ い て

Fig8 1，2，3は，第1次発掘調査で，北郭部竪穴群より出土した土器と同類で，その考察は，第1次発掘調査報告書に奥山が執筆している。

5は近年当地方においてみられるようになってきた土器である。須恵器と色調，焼成は極似するが，須恵器よりも軽く，表面が須恵器のようなていねいな調整ではなく，胎土もかなり荒く，すべて摺鉢であるのが特徴である。これが近年北海道・東北日本海側で問題になっている珠洲焼といわれるものと思われる。

Fig 7 の遺物は，三体で一つの道具になるものと思われる。鉤状鉄器はアイヌの漁撈具にみることができる。名取武光氏のアイヌ土俗品解説に，

鉤針（ホロカナウケウッブ）

4米位の細長く弯曲した柄の先きに，マレック形の反刺のある鉤を固定し，之から細い糸を伸ばす。糸と長い柄の端を手にして，水平に水中に支えて待つ。川を上下する魚が糸に触れると手に感ずる。この時勢ひよく柄を手前に引くと魚は鉤に刺されるのである。一個（八雲）

とあり，Fig 7〔3〕はマレック形の反刺のある鉤であり，固定するために，中空のはめ込み部を有するなど，ホロカナウケウッブと似ている。あるいは同じ働きをするものであろうと思われる。Fig 7〔2〕は，ホロカナウケウッブに柄を固定する場合，両者の接合部をしっかり固定するためのものと思われる。Fig 7〔1〕は，柄の鐶にあてがったものであろう。

文 献

名取武光・犬飼哲夫　北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説　名取武光著作集　アイヌと考古学(一) 掲中　昭和47年

Ⅷ 片山舘コ遺跡について

1972年6月25日の予備調査，1972年7月25日から8月7日までの第1次発掘調査，1973年5月27日から6月11日までの第2次発掘調査により，片山舘コ遺跡において次のことが確認された。

〔形　状〕

1．南北約160m，東西約40mの，北に眺望のきく舌状台地に位置する。

2．舌状台地は中央部を，現幅約20mの空堀で切られ，館城遺構は北郭部，南郭部に分けられる連郭式館城跡である。

3．北郭部は南北約50m，東西35～40m，南郭部は南北約90m，東西約40mで，南郭部南端つまり舌状台地基部に，東西に三重の土塁を配置する。

4．舌状台地中・下位に，他の館城遺構同様，平坦面をめぐらすが，片山舘コのそれは，東側は台地北東端から南端まで，西側は台地北西端から空堀までであり，北側にはみられない。

5．北郭部台地東斜面の平坦部に泉が湧いており（Fig3，矢印）飲料水等はこれを利用したものと思われる。

6．南郭部南端土塁南側は，真夏でも湿気が多く谷地の状態である。

〔発掘調査検出遺構〕

Ⅰ．北　郭　部

1．北秋田地方における館城遺構において，現在までに報告例のない小型の長方形竪穴，方形竪穴群が発見され，その一部は，後北C_2式土器，初期擦文式土器を出土した。

○1号竪穴　長軸方向南北の長方形竪穴

Fig10　北郭部発掘全体図

長辺約1.43m，短辺約1.24m，南端短辺約1.44m，深さ約20cm，長軸線N－12°－W，後北C_2式土器出土。

○2号竪穴　長軸方向東西の長方形竪穴

長辺約2.4m，短辺約1m，深さ約10cm，7号竪穴に切り込まれている。長軸線W－22°－N，2号竪穴，7号竪穴，Fピットの中間地山面より，後北C_2式土器，北大式，擦文式土器の初期段階と思われる土器が出土。

○3号竪穴　長軸方向南北の長方形竪穴

長辺約3.5m，短辺約1.7m，深さ約20cm，南側で10号竪穴と接触，長軸線N－21°－W，天王山系土器出土。

○4号竪穴　長軸方向東西の長方形竪穴

長辺約1.4m，短辺約1m，深さ約10cm，長軸線W－15°－N

○5号竪穴　長軸方向南北の長方形竪穴

長辺約1.9m，短辺約1.4m，深さ約20cm，長軸線N－4°－W，後北C_2式土器，糸切り底の土師器片出土。

○6号竪穴　辺1.6m×1.4mの歪んだ方形プランである。深さ約15cm，竪穴南北軸線はN－4°－W，3本歯の錐状鉄器出土。

○7号竪穴　長軸方向南北の長方形竪穴

2号竪穴を切り込んでいる，長辺約2.3m，短辺約1.7m，深さ約15cm，長軸線N－17°－W。

○8号竪穴　長軸方向南北の長方形竪穴

長辺約1.7m，南北約1.1m，深さ約10cm，長軸線N－13°－W。

○9号竪穴　長軸方向南北の隅丸長方形竪穴

長辺約2.6m，短辺約1.8m，深さ約5cm，長軸線N－18°－W。

○10号竪穴　3号竪穴の南端に接触し，きわめて小型の長軸方向東西の長方形竪穴

長辺約1.4m，短辺約0.7m，深さ約15cm，長軸線W－20°－N。

○11号竪穴　8本柱の方形竪穴で，出入口と思われる張出部があり，2本の補柱がある。

辺約2.45×2.5m，深さ約10cm，柱穴は辺20～30cmの角柱穴で，深さ30～45cmある。竪穴南北軸線はN－25°－W。

○12号竪穴　多種にわたる遺物を出土した方形の竪穴で，柱穴はまったく検出されなかった。

辺約2.5m，深さ約15cm，竪穴中心軸は南北である。陶磁器，銭貨，糸巻き，くりぬき木器，炭火穀物を出土した。

2．13号竪穴，今次調査で発見された，東西約3.9m，南北約3.4m，深さ約30cm，東壁北壁に東西約1.3m，南北約1.1m，東から西へ緩やかに下る傾斜をもつ出入口と思われる突出部をもつ長方形竪穴，竪穴中心軸線は南北である。

3．北郭部南側に重複する2棟の，角柱掘立柱建物跡が検出された。

○建物Ⅰ　桁行5間（7尺等間），梁間4間（7尺等間）の建物で，柱穴は，辺30～40cmの角柱穴で，深さは20～30cm，北側で建物Ⅱと重複，建物Ⅱが時間的に先行する。建物の桁行方向はN－3°－Wである。

○建物Ⅱ　桁行5間（北から5尺・5尺・6尺・7尺・6尺），梁間4間（東から9尺・8尺・7尺・7尺）の建物で，柱穴は，辺20～30cmの角柱穴で，深さは20～30cm，建物の桁行方向はN－5°－Wである。

4．第1次・第2次発掘調査により，北郭部より9コのピットが検出されたが，それらの多くは，北秋田地方ではまったく新しい形状であった。それらは形状より次の4つに分類することができた。

○Pit Ⅰ群　径約1.5mほどの深い鉢形の不整円形ピットの一方に，接触点で幅約1mほど，先端が次第にすぼまり，ピットに向って傾斜する片口状の掘り込み溝が付属するものである。Pit Aは12号竪穴を切り込み，Pit Ⅰは13号竪穴を切り込んでいる。Pit Cは小型である。
(Fig10－Pit A・B・C・I)

○Pit Ⅱ群　比較的小型で浅い円型ピットである。Pit Eの内部周壁には，桶状の縦の側板と思われる痕が顕著である。(Fig10－Pit D・E)

○Pit Ⅲ群　2号竪穴または7壁竪穴の付属施設と思われるもので，方形の浅い掘り込みの内に径90cm，深さ80cmの円形ピットが掘り込まれている。(Fit 10－Pit F)

○Pit Ⅳ群　今次発掘調査により検出されたもので，円筒状の比較的深いピットである。
(Fig10－Pit G・H)

5．北端部に東西に延びるV字溝が発見されたが，その性格・目的は不明である。

Ⅱ．南　郭　部

1．長方形・方形掘り込みが5コ検出されたが，これらは南郭部東側における一体の遺構と思われる。

○掘り込みⅠ　南北約2.8m，東西約1.9m，深さ40～45cmの長方形掘り込み，長軸線はN－5°－W。

○掘り込みⅡ　南北約3m，東西約50cm，深さ25～30cmの長方形掘り込み，長軸線は南北。

○掘り込みⅢ　南北約2m，東西約60～65cm，深さ30～35cmの長方形掘り込みの真端に南北約1.2m，東西約50cm，深さ35～40cmの掘り込みがとりつけられたもの，長軸線は南北。

○掘り込みⅣ　南北約3.5m，東西約1m，深さ35～40cm，長軸線N－6°－W。

○掘り込みⅤ　南北約1.9m，東西約2.2m，深さ55～60cm，竪穴南北中心線N－4°－W。

2．長方形掘り方Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを覆う角柱掘立柱建物で，軒を南北に下げる切妻風の建物であろう。桁行7尺等間の3間，梁間8尺・6尺の2間の建物である。桁行軸線は，W—10°—Sである。

3．小型の隅丸方形竪穴　東西約1.8m，南北約1.5m，南北中心軸は南北。

4．東側南端部に発見された土壙墓は，東西に長いだ円形ピットであり，御殿山にみられる配石のないアイヌのだ円形土壙墓に類似するものであろう。(1)

Ⅲ．北郭部，南郭部に共通して数多くみられた円・角柱掘立柱穴は，一部は竪穴柱穴として，一部は掘立柱建物として，一部は柵木として用いられ，一つの建造物としてのつながりを明らかにすることができたが，その他の多くの柱穴は，一つのまとまった建造物としての関連を把握できなかった。これらを図上でみてみると，北郭・南郭のそれらは，3～4mほどの円を描きながら，1つのグループを形成しているようにも見られる。簡単な小屋掛けによる掘立小屋のようなものかも知れない。

〔出土遺物〕

1．土　器

○北郭部の竪穴群からは，後北C_2式土器が床面より検出され，東北北半における後北C_2式土器と竪穴の関連をつかまえることができた

○陶器片は，この地方の勢力圏，交易範囲，文化程度を語ってくれる重要な資料であるが，このような重大問題を考えるには，数的に不足である。東京国立博物館東洋美術室長長谷部楽爾氏，秋田県博物館準備局奈良修介氏，秋田県文化財専門委員小野正人氏(2)に教示を得た範囲では，12～14世紀頃の陶器が中心であった。

2．鉄　器

鉄器は，小札・鋸様・三本歯の錐状鉄器，クサビまたは船釘様，刀子様の多種にわたるものが出土したが，小札は，前述した七館遺跡からも出ている。(3)

3．銭　貨

12号竪穴より，熙寧元宝・紹聖元宝・大観通宝が出土している。

---

(1) 藤木英夫　北の墓　昭和46年　学生社

(2) 館コ発掘調査報告書　大館市史編さん委員会　1973・3

4．南郭部南端の土坑より，アイヌの漁撈具ホロカナウケウッブと思われる鉄器が出土している。

以上，片山舘コについて，その形状，これまでの発掘調査による遺構・遺物をまとめてみたのであるが，現在の館城の形状を構える前に，後北C_2期一北大式期・土師期一擦文式期にかけて，集落的な堡塞としての時期があったと思われる。いわば，チャシといえる性格をふくんでいたかも知れない。

この後，室町から中世末期にかけて，土塁・空堀，台地周囲の中段（平坦面）をめぐらす，館城の形が造成されたものであろう。

空堀により北郭と南郭に分けられる。その郭は，検出された遺構より，性格の異なる，いわば使用目的により，はっきりと区画されていたようである。

北郭部より検出された，角柱掘立柱建物はこの館城の所有者の居宅と思われ，館城跡の中心をなすものであろう。

南郭部は，北郭部の居住区域に比べて，作業場的な意味をもつ地域で，それも東側と西側では遺構の異なる点より，やはり区画されていたものと思われる。

北秋田地方には数多くの館城跡が存在するが，現在までのところ学術的に調査の手が加えられたのは数例[(4)]のみである。「館」と名がつけば，それは中世末期の戦乱期に興亡した士豪が築きあげたものと思われてきたが，それ以前にも人の生活があったことを，片山舘コは明らかにしてくれた。

まだ残されている多くの館城跡を明らかにすることは，「チャシ」と「館」，「蝦夷」と「アイヌ」という重大な問題に，大きな示唆を与えてくれるとともに，文化・経済・社会等の把握のために重要な意義をもつものであることはいなめない。

(3) 前掲「館址」のは長さ5.8cm，幅1.8cm，一端が斜めに切れた鉄製小札で，2列に計14個の小孔を設けている。片山舘コ出土のそれは，一片が長さ6cm，幅2.5cm，厚さ3mm，2列に7個ずつ計14個の小孔が並び，もう一片は長さ6cm，幅2.5cm，厚さ2.5mm，1同様の小孔を設けている。

(4) 昭和30年　東京大学東洋文化研究所による鹿角市小枝指「七館」
昭和47年　大館市史編さん委員会による北秋田郡比内町「谷地中館」
昭和47年　奥山　潤・富樫泰時両氏による北秋田郡比内町「真館」
昭和47年～48年　大館市史編さん委員会による大館市「片山舘コ」

謝　　辞

末文で失礼ながら，本調査を実施するに当って，特に寛大な承諾と御理解を賜わった，地主の片山在住谷地田　弘氏，片山部落会長谷地田一雄氏，出土陶器について種々の教示を賜わった，国立東京博物館長谷部楽爾氏，県立文化財専委小野正人氏，今時調査で出土したホロカナウケウッブについて教示を賜わった，北海道大学大場利夫教授，札幌大学石附喜三男助教授，現場で指導・助言をいただいた，県博物館準備室奈良修介氏，遺物写真撮影の大館市越前貞一氏，直接発掘に助力下された市社教課斎藤隆悦氏に厚く御礼を申し上げたい。

PL 1 〔1〕　舘コ全景（右二ツ山）北東より

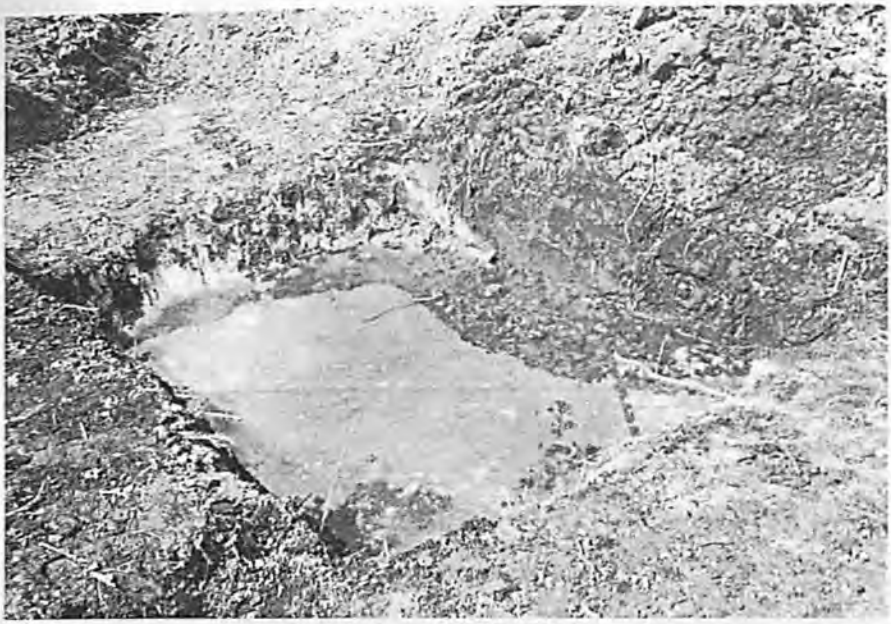
PL 2 〔1〕　南郭部発掘写真　西より

PL 2 〔2〕　南郭部東側遺構　北より

PL 2 〔3〕　南郭部西側遺構　北より

PL2〔4〕　南郭部西側遺構　南より

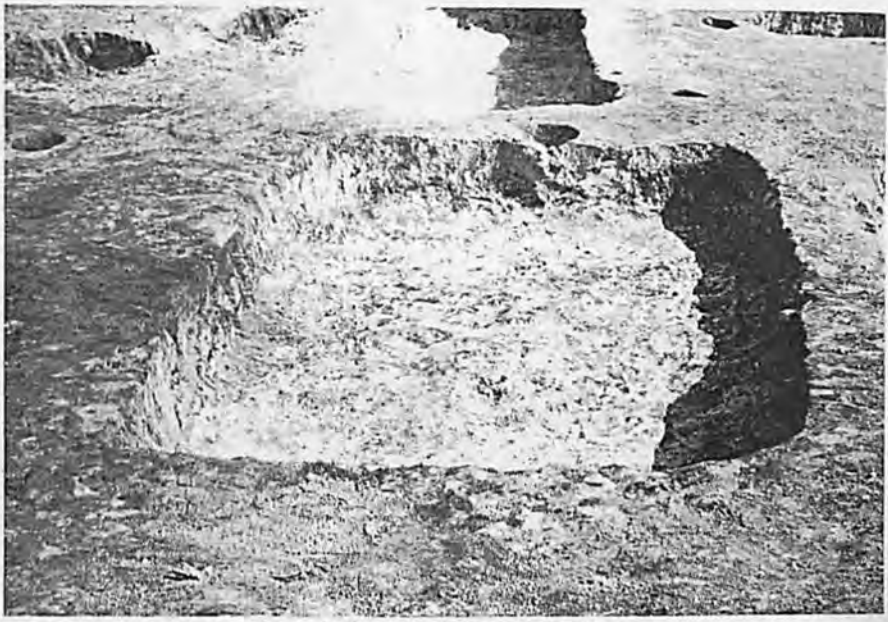
PL3〔1〕　土　墾　南より



PL3〔2〕　土塁間溝　南西より

PL3〔3〕　土塁間溝　南より

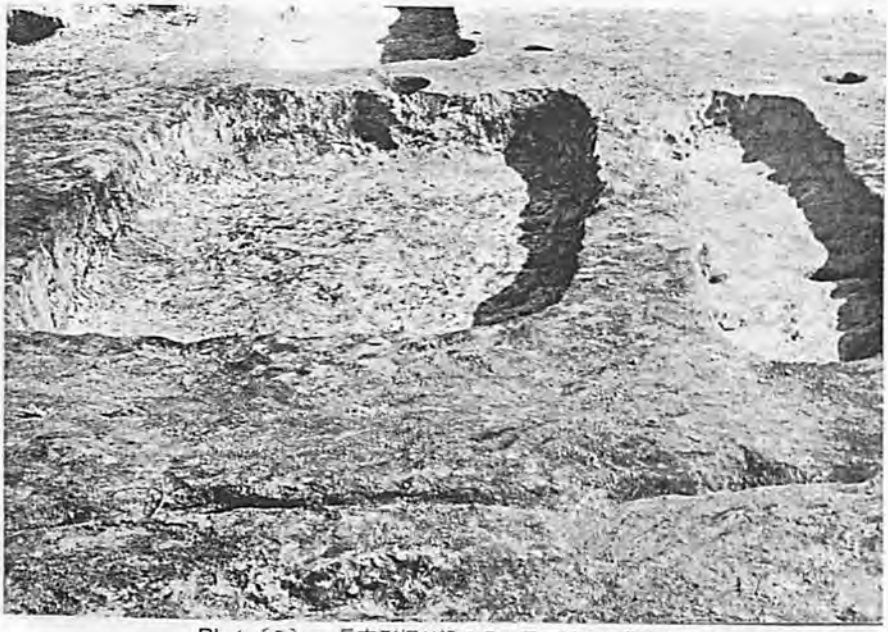
PL4〔1〕　南郭部東側掘り込み遺構　南より



PL4〔2〕　長方形掘り込みⅠ　北より

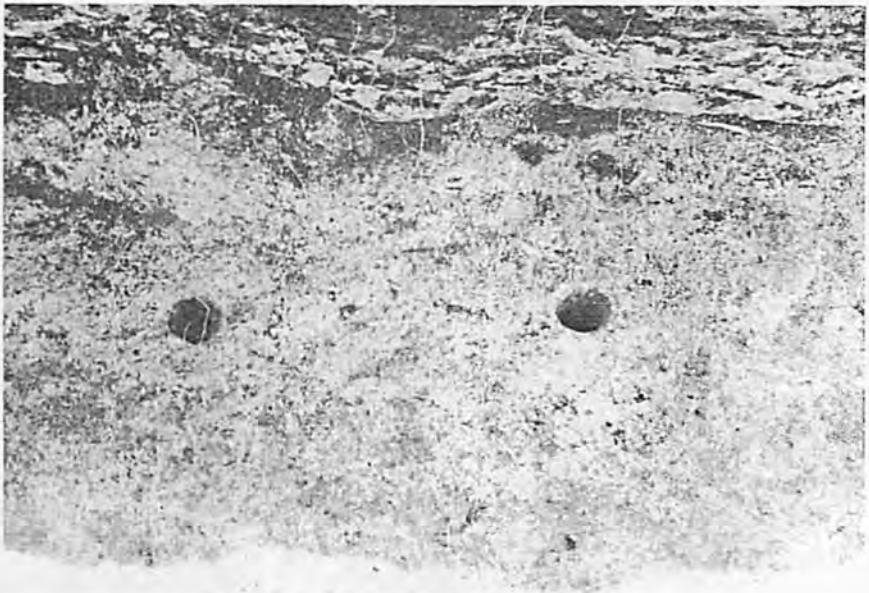
PL4〔3〕　長方形掘り込みⅡ　北より

PL4〔4〕　長方形掘り込みⅢ　北より

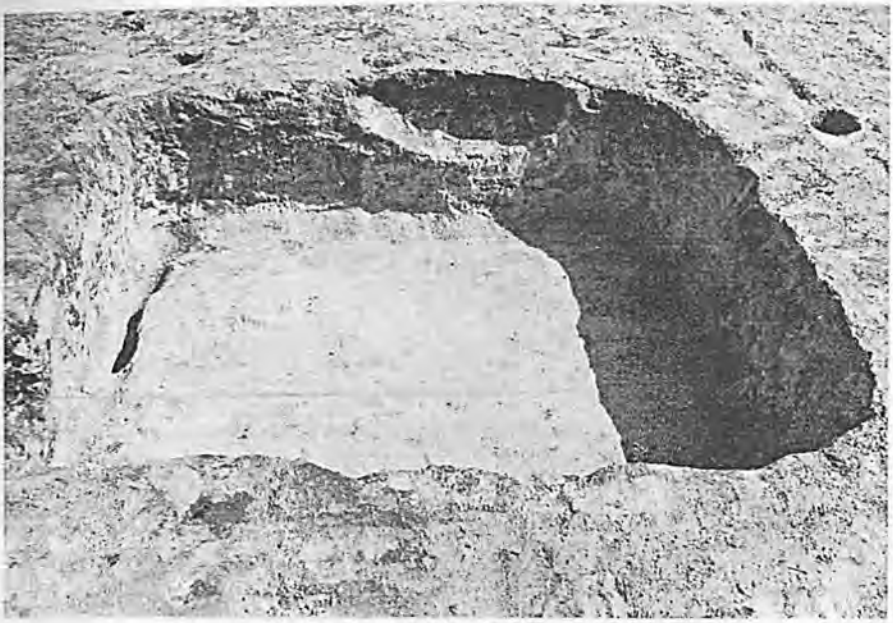


PL4〔5〕　長方形掘り込みⅠ・Ⅱ・溝A　北より

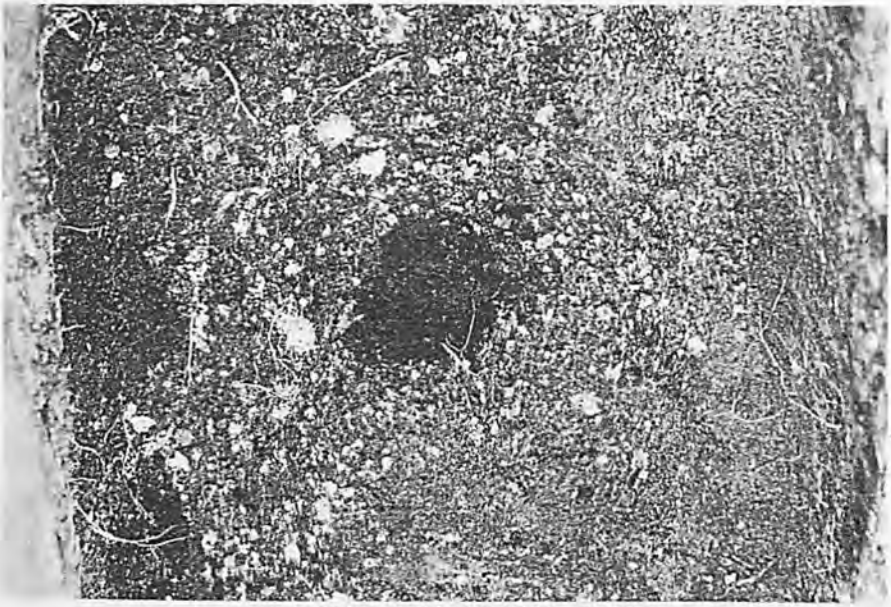
PL4〔6〕　長方形掘り込みⅣ　南より



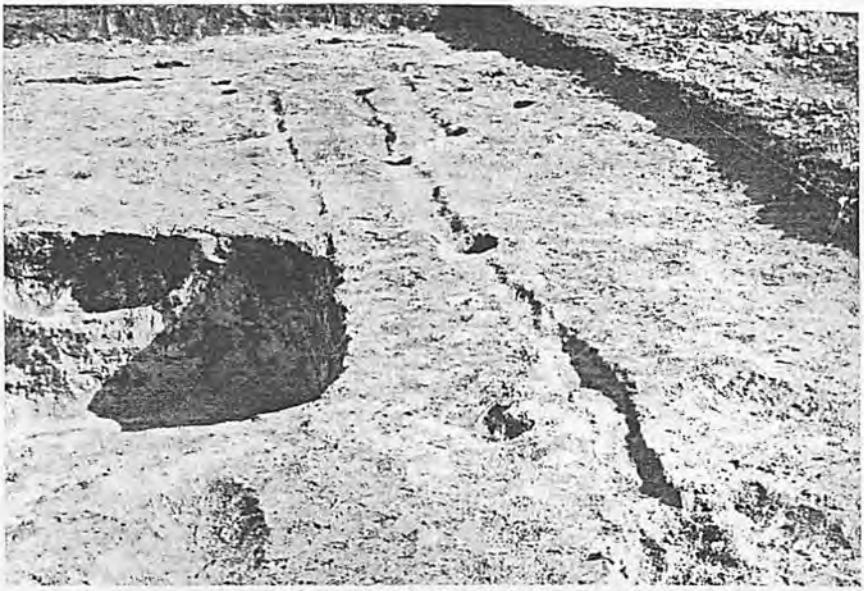
PL4〔7〕　長方形掘り込みⅣ内柱穴　東より



PL4〔8〕　方形掘り込みV　北より

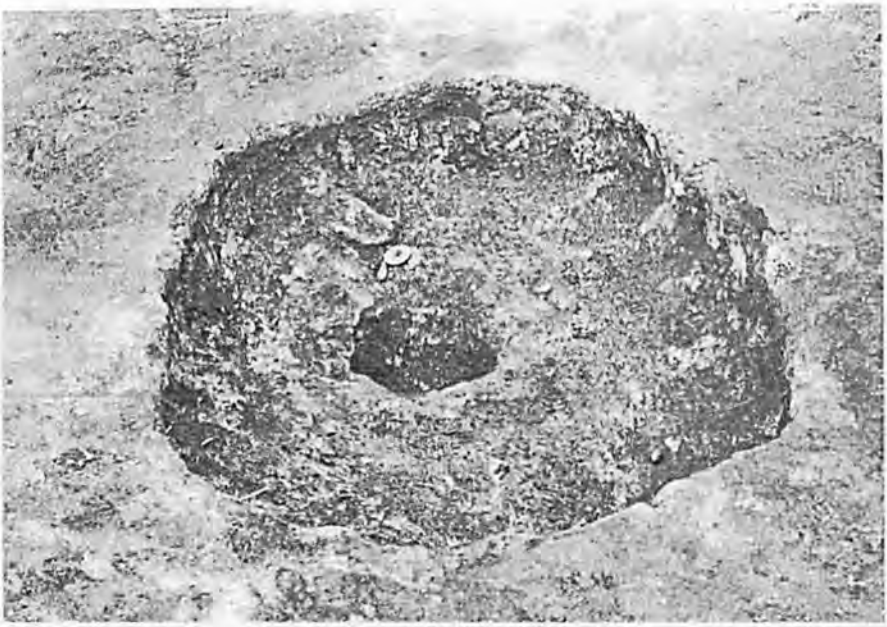


PL4〔9〕　掘り込みV内柱穴　東より

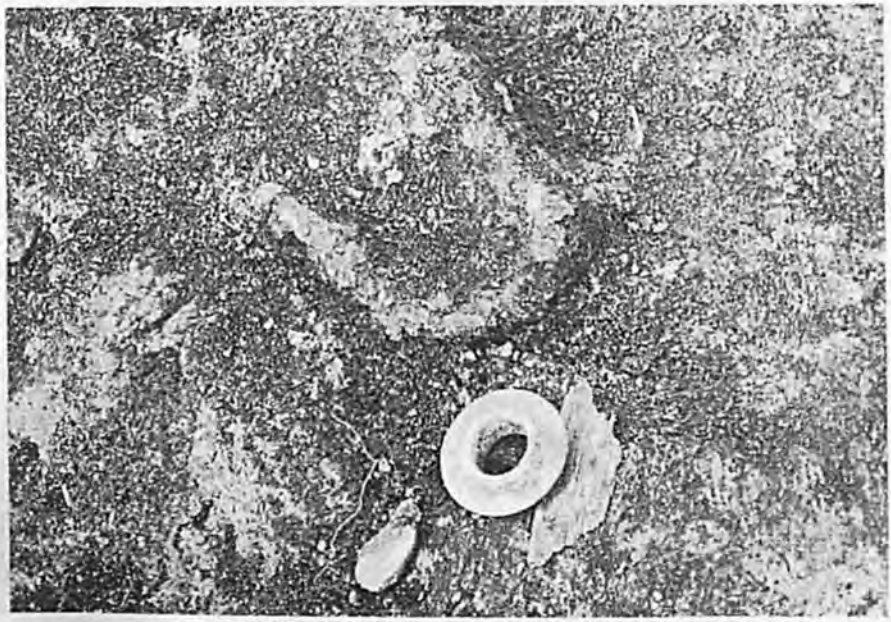


PL 5 〔1〕　方形掘り込みⅤ　溝B　北より

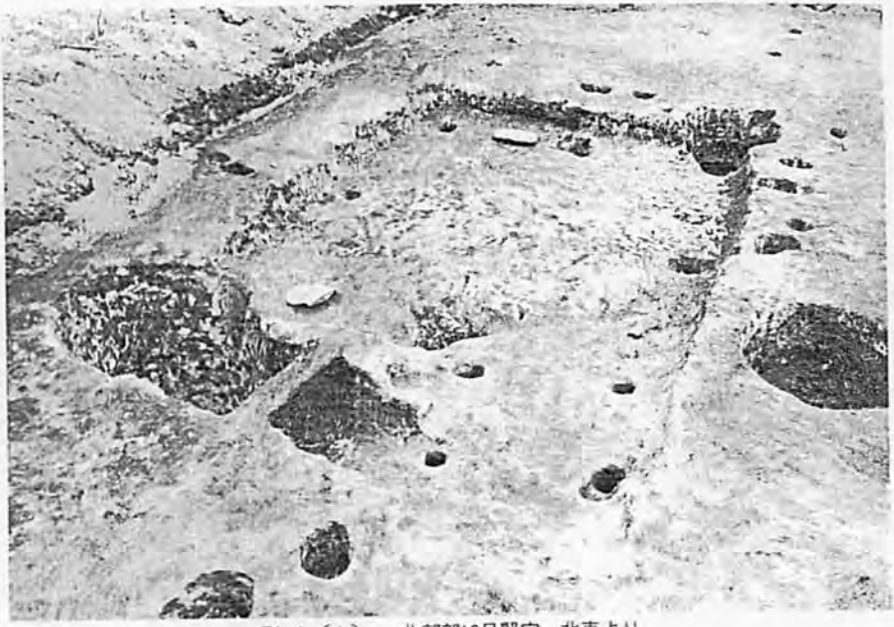
PL 5 〔2〕　隅丸方形竪穴　北より



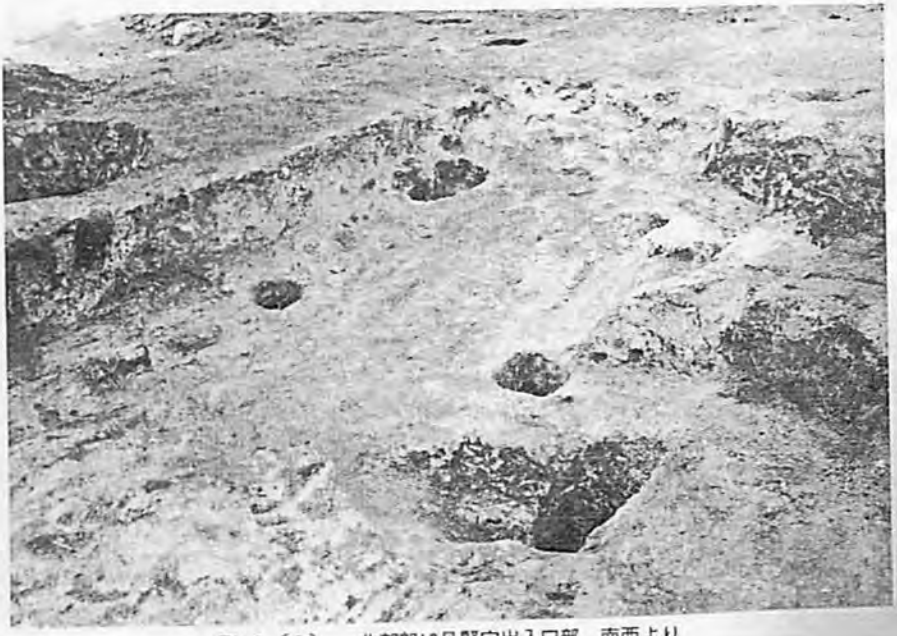
PL 5 〔3〕　南郭部東側土坑墓　西より



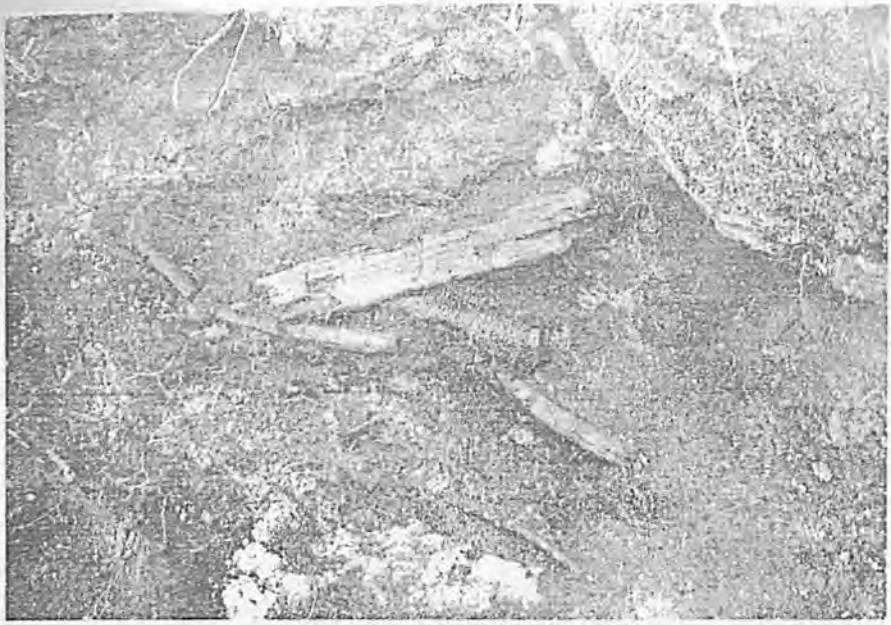
PL 5 〔4〕　南郭部東側土坑墓内遺物出土状況　西より



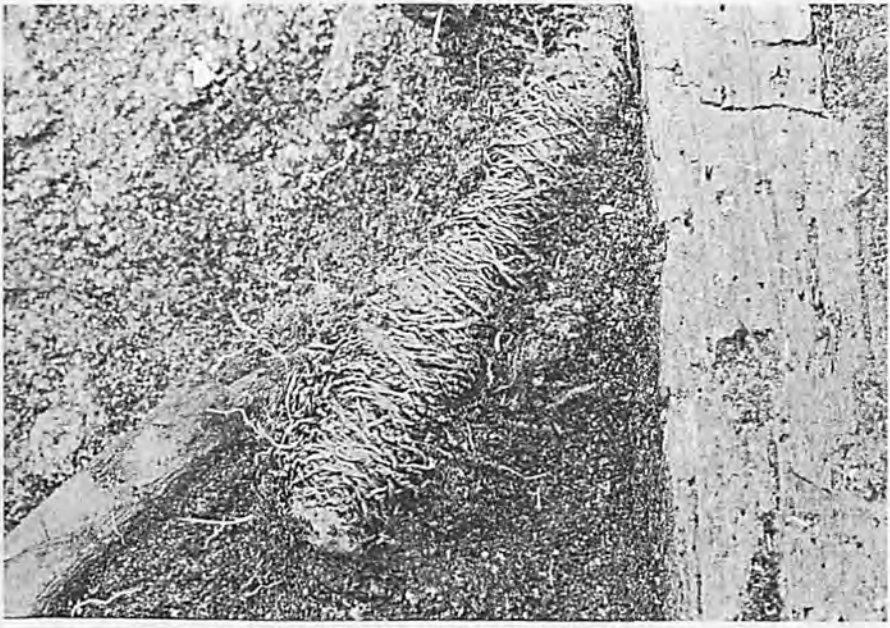
PL 6 〔1〕　北郭部13号竪穴　北東より



PL 6 〔2〕　北郭部13号竪穴出入口部　南西より

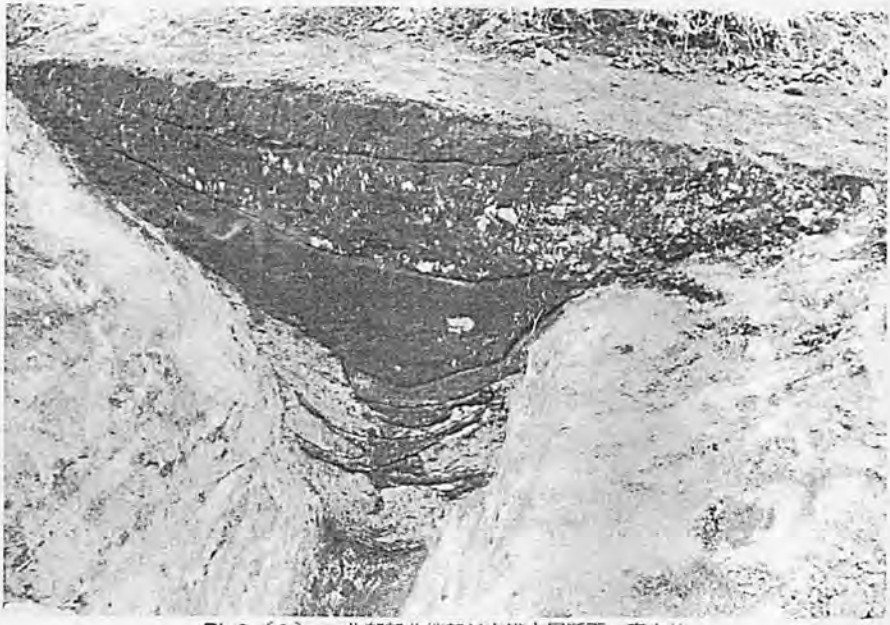


PL 7 〔1〕　12号竪穴糸巻き出土状況

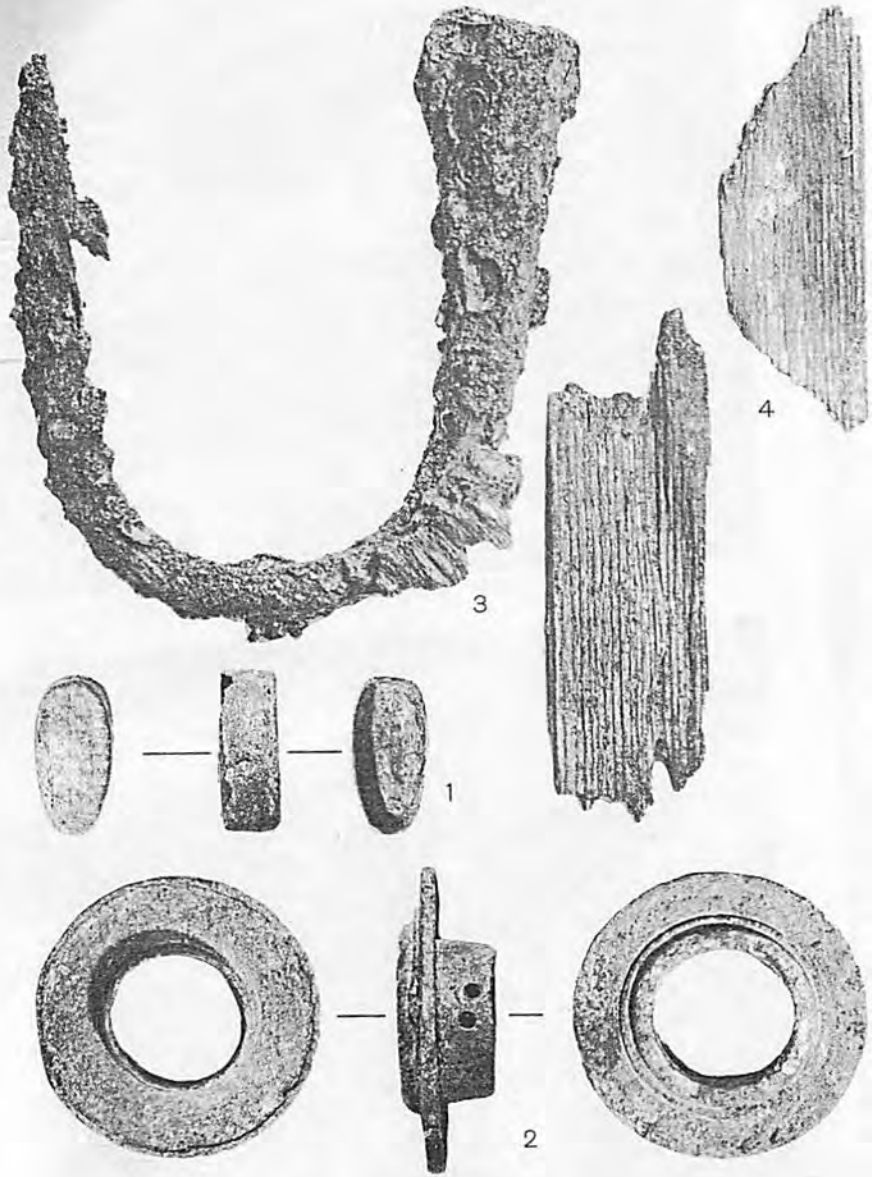


PL 7 〔2〕　12号竪穴糸巻き出土状況

PL 8 〔1〕　北郭部北端部V字溝　東より



PL 8 〔2〕　北郭部北端部V字溝土層断面　東より



PL 9　土坑墓内出土遺物（現寸大）

大館市史編さん調査資料第13集

大館市片山「舘コ」発掘調査報告書

1974・3

発刊　大館市三の丸 13—1
大館市史編さん委員会

印刷　(有)大館孔版社　大館市谷地町後